

て果して満足に寫つて居るか否かを驗べなければならぬ。これにも是非吾々が毎夜寫眞店に出かけて一々水から上げて検査しなければならぬ。此等の仕事の中、最も厄介なのはこの暗室に籠つて、引切りなしに送られて来る取杵の原板を外して、新たなる乾板に入れ替へ、且つそれべし仕分けをして置く役であるが、寫眞師二人は義理にも撮影係にまはさなければならぬ。當然の運命として暗室入りは余の役目となり、従業中、窮窟な暗の世界に立ちつけ、晝食の爲、その晝食の數片のサンドウイッチの乾燥さと鹽辛さとを耐へて、宮殿の番人から貰ふ茶で嚥下する慘怛さは今尙ほ忘れ得ない。外に出ると暫くは眼も明けられない。當時博士と同行して同じ吾等の宿舎に居られた富岡桃花氏から土龍子の綽名を貰ふに至つた。殘る帖附けの役がまた當然博士に廻らなければならぬ。四月上旬の奉天である。地下二寸はまだ氷結して居る。時には吹雪の襲來もある。加ふるにガランドの宮殿の外廊、火の氣とてもないことであるから、厚い外套を纏うても尙ほ寒さは土くさい空氣と共にヒシヒシと逼つて来る。一枚一枚と寫眞の進みに従つて、寒さに縮曲みながら、多念に帖附けの紙片を挿み込んで行かれる博士の姿を、取杵送り込みの度ごとに僅かに開かれる暗室の戸の隙から覗ふたびに、噫學術の爲なればこそと、尊敬と感謝の念に打たれるのであつた。その中一日余は風邪に冒されて從業を休まなければならぬことになつた。かうなると帖附けの方は豫かじめ順序を定めて撮影係に委ねて置き、博士自から暗室の中に入れられなければならぬことになつた。その日宿舎に歸つて來られた博士は、腰の痛みをさすりながら、それでも元氣好く、今日はお蔭で好い體験をしたとのみ言うて居られた。かくて一日五百枚にも餘る寫眞をするやうな日が二旬あまりも續けられ、兎も角もこれらの二書一萬餘枚を寫眞して將來することが出來た。今日我が東洋史研究室に存置されてあるのがそれである。足袋のコハゼをか